

ようだというのでそう呼ばれたらしい。写真を見るとよくある雑草。固有名詞の面白さで成立した作。

妹の作つてくれたおでん食べ日本旅行ゆるゆるの終わる
鴉沢梢

カナダのパスポートで日本に來た作者。特に用事があるわけではない、気ままな旅の雰囲気がよくでている。結句「ゆるゆる終わる」がポイント。

入口のマットは少しずつずれて毎夕自動扉を止める
鬼東美佐子

会社の入口のマットを擬人法でうたう。どこことなくユーモラスなのは、常識的な感覚をちよつとはずしているからである。毎日のことだし、だれかが修正すればいいのだけれど、だれもやらないのだ。

四隅から始発の座席埋まり行く烏鷺の定石知りたる
蔵田道子

始発や最終の電車に取材した作はよくあるが、比喩の意外性で特色ある作になっている。「烏鷺」は、黒と白の意味で、囲碁のこと。なるほど始発電車の座席は、四隅からうまつてゆく。

独断となるを避けたし幾たりか捕まへさぐる人望の
間宮清夫

人事異動を決定する管理職の心理心情を表現した一連中の作。表現しにくいところをあえて歌にしている挑戦的な姿勢に注目。ただ、あまりに真つ当過ぎるところが、短歌としてはものたりない印象。「幾たりか」のあたりに意外な一語がほしかった。

けふよりは病衣にあらぬ君にしてチエツクのシヤツに寛ぐごとし
古川典子

入院している「君」を見舞ったおりの作。今月の一連に「……心の花原稿用紙ベッドサイドに」という作もあるので、この歌の「君」は元編集委員の小紋潤君のことかな、そう思つて読んだ。下旬、いかにも体調のよさそうな「君」の状態が読める。

つやつやの秋の陽射しに胸張つて巨峰の色のミニバンが行く
森屋めぐみ

「胸張つて」はどんな感じなのかなと、ミニバンの写真をネットで検索してみた。これかな、と思えるのは、幅の広さ、高さともミニバンでは一番大きいトヨタのヴェルファイアが目にとまった。巨峰の色のこの種類があるのかどうか私は知らないが、一首、秋光のなかをゆく颯爽とした若い男性のような感じがたのしい。

白黒の冷たい雨の降る朝將軍が冬の兵を進める
伊井かずひろ

「白黒」はモノクロームの意味だろう。「モノクローム」と振り仮名をふつてもよかったのではないかと思う。下旬の擬人法、「進める」が、いい。

額に手を当て「ありがとね、ありがとね」ついに句点を打とうと義母は
加古陽

義父の死をうたう一連中の一首。呼吸がとまった夫の枕辺で、句点を打つて、気持ちに区切りをつけようとしている義母をクローズアップして、印象的。